平成二十九年度
群馬県立女子大学 文学部 総合教養学科
転入学・編入学試験問題

専門科目

試験時間は、九十分です。中途退室は認めません。途中で気分が悪くなった場合は、黙って手を上げてください。

問題用紙は二枚です。他に下書き用の白紙が二枚入っています。
解答用紙は二枚あります。それぞれが配られたら、指示に従って解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入してください。
試験開始の合図があるまで表紙をめくって問題を見てはいけません。

解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待ってください。

以下の文章は、一七世紀のフランスの哲学者ルネ・デカルトの『省察』からの抜粋です。これを読み、以下の二つの問いに、合計一〇〇〇字以内で答えなさい（それぞれの問いに対する解答の文字数の配分は問いません）。

①デカルトは、人間が持つ、以下の三種の認識に資する能力、すなわち、〈視覚や触覚などの感覚〉、〈想像〉、〈精神の洞察〉を区別しています。この区別を可能にするような、それぞれの能力が持つ特徴は何か、考察しなさい。

②デカルトによれば、私たちは蜜蠟を、〈感覚〉や〈想像〉によってではなく、〈精神の洞察〉によって認識します（傍線箇所参照）。なぜそのように結論できるのでしょうか。デカルトの論拠を踏まえた上で、自らの言葉で説明しなさい。

すべてのうちで最も判明に理解しているとふつう思われているもの、すなわちわれわれが触れたり見たりしている物体を考察しよう。〔…〕例としてこの蜜蠟[1]を取り上げよう。それはたったいま、蜜蜂の巣からとり出されたばかりである。それ自身の蜜の味のすべてをまだ失ってはおらず、そこから集められた花の香りを多少とも留めている。その色、形、大きさは明白である。固く、冷たく、容易に触れられ、指でたたけば音がする。要するに、そこに備わっているものはすべて、ある物体がきわめて明証的に認識されるために必要と思われるものばかりである。ところが見ていただきたい。私がこう話している間、それを火に近づけると、残っていた味は抜け、香りは消え、色は変わり、形はくずれ、大きさは増し、液体になり、熱くなってほとんど触れられなくなり、もう打っても音を発しなくなる。それでもなお同じ蜜蠟が残っているのだろうか？　残っていると認めなければならない。だれもそれを否定しないし、だれも別のようには考えない。では、蜜蠟においてあれほど判明に理解されていたのは何であったのか？　たしかに私が感覚で捉えたもののいずれでもない。というのも、味覚、嗅覚、視覚、触覚、聴覚の下に感じとられたものはみな、いまや変ってしまったが、蜜蠟は残っているからである。おそらくそれは、いま私が考えているものであったろう。すなわち、蜜蠟そのものは、あの蜜の甘さでも、花の香りでも、あの白さでも、形でも、音でもなく、少し前にはあのような仕方で、だが今は別の仕方で私にまざまざと現れている物体であった。しかし私がこのように想像しているものは、厳密には何であろうか？　注意してみよう。そして蜜蠟には属さないものをそこから取り除けば、何が残るかを見てみよう。すなわち残るのは、延長〔＝広がり〕をもち、柔軟で、

変化しやすいあるものだけである。しかし、この柔軟で変化しやすいとはどういうことであるか？　この蜜蠟が、円形から四角形へ、あるいは四角形から三角形へと変化しうることを私が想像するということか？　いやけっしてそうではない。というのも、蜜蠟がこうした無数の変化を受けることを私は理解するが、しかし私は無数の変化を想像によってたどりつくすことができず、それゆえ想像の能力によっては、蜜蠟の理解が得られることはないからである。延長をもつことはどうか？　だがその延長ということ自体も知られていないのではないか？　というのも、その延長は、蜜蠟が溶けると大きくなり、沸騰すればさらに大きくなり、熱が増せばもっと大きくなるからである。私が、蜜蠟が何であるかを正当に判断しようとすれば、蜜蠟には、延長という観点から、かつて私が想像によって抱いていたよりも多くの多様性があると認める、と考えるのでなければならない。結局、残るところは、私はこの蜜蠟が何であるかを、けっして想像するのではなく、ただ精神によってのみ認識すると認めることである。〔…〕だが、精神のみによってしか認識されないこの蜜蠟とは何であろうか。それは、私が見、触れ、想像する蜜蠟と同じもの、結局、最初に思っていた蜜蠟と同じものである。しかし注目すべきことは、蜜蠟の認識は、視覚や触覚や想像によるのではなく、たとえ以前にはそう見えても、そうであったのではなく、むしろただ精神の洞察のみによることである。

[1]蜜蠟（みつろう）：ミツバチの巣を構成する蝋（ろう）。働きバチの腹部の腺から分泌されたもので、巣を加熱圧搾したり、湯で煮溶かしたりして採取する。精製したものは白色である。つや出し剤・化粧品などに利用される。

ルネ・デカルト著、山田弘明訳『省察』（筑摩書房、二〇〇六）

〔〕内は引用者による補足、〔…〕は中略を指す。